

浸水域に加えて、各地域の避難所と災害対策本部の場所、鉄道路線の運休区間や道路の通行禁止・規制区間が網羅されており、それから間もなくして刊行された後者には、国土地理院の地形図（1/2.5万）の上に詳細な津波浸水分布と津波浸水高および津波遡上高が示されていた。このような既往の調査資料は、次章以降で述べようとする学校の津波避難行動の考察のためにも極めて有用なものであった。

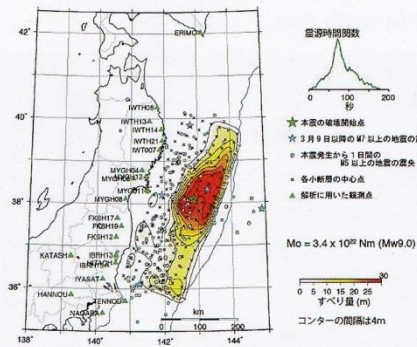


図1 東北地方太平洋沖地震の震源モデル（気象庁気象研究所 [6]による）

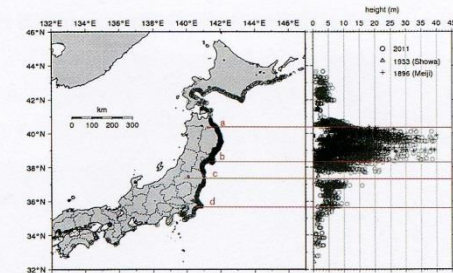


図2 津波浸水高の地域分布（柴山 [7]による）

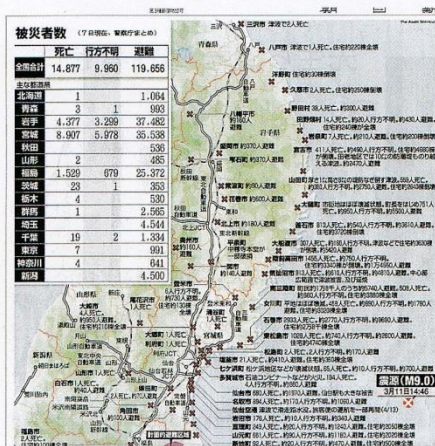


図3 東日本大震災の被害分布と被災者数（朝日新聞 [9]による）

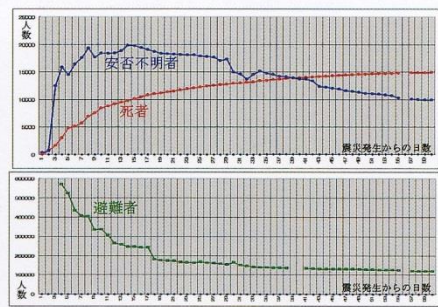


図4 東日本大震災における被災者数の推移（警察庁発表、朝日新聞より採録）

### 3. 海岸平野における学校校舎への避難行動

#### 3.1 仙台市立荒浜小学校の場合

最初に注目したのは仙台市若林区荒浜地区の荒浜小学校である。すでに学校関係者の間では、津波避難場所として学校が有効に機能した事例としてよく知られており [3]、マスメディアにも取り上げられている。人口2,709人、983世帯（2010年5月の仙台市による統計資料）の荒浜地区は、仙台平野ほぼ中央の海岸沿いの一画に古くから形成された集落密集地で、津波に対しては鉄筋コンクリート（RC）造4階建ての荒浜小学校が唯一の避難場所となっている。今回の津波は、図5に見られるように、内陸へ向かって4kmもの広範囲に及んでおり、この範囲には荒浜小学校以外には適当な避難場所は見当たらない。本来の指定避難場所は5kmほど内陸の七郷小学校だったようであるが、緊急時の避難には間に合わないことから、最近では荒浜小学校に立て籠もることを前提にした避難訓練を繰り返し実施してきたとのことである。3.11津波からの避難行動はそのような事前の訓練通りに実行され、2階まで浸水しながらも避難者の受入れ態勢は校長先生の指揮のもと円滑に行われ、生徒や教師、地域住民など320人

が避難し救助された後には、住民の自治組織に管理を委ねて避難生活が運営されている（写真1～写真5）。もしも荒浜小学校以外に避難場所を求めようとすると、前述のように、仙台東部道路を超えてさらに内陸方面へ4～5kmも歩く必要があり、車での避難は途中で大渋滞を引き起こしたに違いない。現にそのような避難行動を取った住民の方が多数おられたはずであるが、その結果がどのようなものであったかについては情報が得られていない。荒浜海岸に建立された津波犠牲者の慰霊碑には犠牲者190人の名前が刻印されているのみである。



図5 仙台市荒浜地区周辺の津波浸水分布  
（原口・岩松 [11]による）



写真01 荒浜小学校の屋上に避難した被災者（仙台市 [12]による）  
地域住民を含めた320人が校舎に避難していた。



写真02 荒浜小学校周辺に襲来した津波（仙台市 [12]による）  
荒浜地区には小学校以外に避難できる場所はなかった。



写真03 荒浜小学校1階廊下の被災状況(2013.4.20.撮影)



写真04 荒浜小学校2階廊下妻面の被災状況(2013.4.20.撮影)  
津波はこの海側妻面から2階にまで侵入していた。



写真05 荒浜小学校4階教室の黒板(2013.4.20.撮影)  
板書は教室が緊急避難場所として使用されていたことを示している。